

身体を介した相互交流

－ 晴眼者による視覚障害者の「手引き」を捉え直すためのインタビュー調査 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
溝田 真由加

本研究は、晴眼者と視覚障害者の歩行である「手引き」について、晴眼者が視覚障害者を「誘導」する行為と呼べるものであるかどうかを問い直し、「誘導」が適切ではない場合、どのように意味づけるべき行為なのかを検討するものである。検討に当たっては、視覚障害者が晴眼者の腕を持つという「手引き」の身体接触の特徴に着目した。

本研究では、晴眼者と視覚障害者の双方に研究協力を依頼した。研究者の主観や先入観を取り払い、研究協力者の立場から各人の体験の中で生じた事象そのものを捉えるために、データの分析方法には、現象学的アプローチを採用した。

調査の結果、「手引き」時において視覚障害者と晴眼者が身体接触を通して知覚するものには、大きく【身体の状態】、【動き】、【触れ合い】の3つの側面が関わっており、それらが両者の歩行や関係性に影響を与えていることが明らかとなった。そして「手引き」は晴眼者が視覚障害者を誘導するような一方的な行為ではなく、能動的な個人と個人が意思をやり取りすることにより絶えず作り上げ、積み重ねられていくものであることから、「協働行為」と呼ぶべき行為であった。両者の間には身体接触があるが故に様々な感情の湧き起こりが生じるが、それは「協働行為」の場における現実を映し出しており、両者はそれらの感情を全て認めた上で、どのように歩行していくかを模索していくことが必要であると考えられた。